

陛下の終戦の玉音は病院入院中に拝聴しました。内容は詳細に知ることができなかったが敗戦であることは分かりました。

終戦後、ムドンで武装解除を受け、捕虜生活が始まりました。ムドンに収容されたのは三万人に達しました。ゴム林の中の雑木を伐採し、竹の柱に竹の梁、屋根は茅、壁は葦のような草を編んで使用しました。抑留生活は、起床後営庭の広場で終戦の詔勅を奉読、朝食、作業開始が日課でした。

船舶工兵隊は主として鉄橋架橋が主体をなしていました。糧秣受領、薪取り、衛兵勤務、炊事当番、米の脱穀精米、水汲み、風呂当番等々の集団生活は多岐多様な作業が伴いました。特に英軍は衛生については厳しく、炊事場、便所等の検査は厳重でした。

我々船舶工兵隊は、その技術面が英軍に高く評価され、ビルマ奥地のメイミョー地区の作業に残留することとなりましたが、隊長の強硬な申し入れで、病人や退院患者等は残留組と区別して取り扱われたため、私達の退院患者は一般隊員より一年も早く帰還の恩恵を

得ることができました。隊長のお陰だと感謝しています。

昭和二十一年七月、リバティーに乗船、帰還の途につきました。昭和二十一年八月二十八日、懐かしい故国大竹港に入港、帰郷後木次町において農業に従事、町和牛組合組合長として頑張っています。

ビルマ戦線従軍記

香川県 玉地 静 夫

私は、大正十四（一九二五）年二月十三日、香川県大川郡津田町で生まれました。昭和十八（一九四三）年徴兵検査を受け第一乙種合格。歩兵で丸亀西部第三十二部隊へ現役兵として入営しました。

私が入営した当時の我が家の状況は、農業を営む両親に六人の兄弟姉妹（私は長男）、それに母の妹と田舎の平凡な家庭でした。

私の入営は、昭和十八年三月一日でした。丸亀の西部第三十二部隊でしたが、実は第五十五師団第一一二連隊（壮八四一五部隊、在ビルマ）補充の要員でした。約三カ月後の六月二十日、丸亀を出発して門司港へ向かい、ビルマの母隊を追及するため、外征の途につきました。内地の丸亀在隊中噂に聞いていた、内務班での「気合入れ」は私的制裁の禁止という事で影をひそめていましたが、初年兵同士の対抗ビントは盛んで、これには閉口し弱った思い出があります。

さて、門司港にて乗り込んだ御用船は約一万トントクらしいの貨物船で船名は「飛龍」で約二〇〇〇人位乗船したと思います。この船には幸いにして軍馬を積み込んでなかったのです。悪臭や高湿度に悩まされることはなくラッキーでした。とは言え、約二〇〇〇人も収容している。そのため船底から十二〜十三段の棚に完全軍装で入り、天井は低く体は真っ直ぐ伸ばせず、上体を九〇度折り曲げて歩行する。畳半枚の面積に二人ぐらい、食料、装具、靴を持って入る。もう暑くて汗ま

みれで波にゆられて食欲もなくなる。でも元気な戦友は涼しい顔をして、三度の飯も毎回二人前ペロリと平らげてうらやましがられていました。

船は朝鮮半島沿いに北上、黄河及び揚子江の濁流を利用して敵潜より身を守って黄海、東シナ海を南下し、三日目に台湾の高雄へ入港しました。ひとまず安心である。夜を待つて出港。その夜明け、敵米潜の攻撃を受けました。隣の船が魚雷で舷側に大穴をあけられましたが、不幸中の幸いか沈まず航行を続けていました。とはいえ、二十隻程の船団は周章狼狽してチリヂリバラバラ。私の船はマニラへ無事入港できて嬉しかったことを思い出します。そして戦況の劣勢を嫌というほど味わされ、前途に不安を抱きました。

戦友は皆弱音を吐かず、黙々と日夜を過ごすのみ。とにかくマニラの港に四十五日程いました。ビルマへの便船待ちである。その間入港してくる船の荷物の出し入れの使役ばかり、やっとのことビルマ行きの船に乗り、南シナ海を南下し、ボルネオ島を左に見ながら

シンガポールへ上陸しました。

それからマレー半島を鉄道で北上しました。タイムン国境で敵グラマン戦闘機の機銃掃射を受け、七人戦死。生まれて初めての経験でした。列車は夜間走行し、昼間は林の中などへ隠れて休止していなければ空襲でやられます。移動や行軍は必ず夜間にする。ようやくラングーンへ到着しました。

母隊は八号作戦に参加中で、インパールよりマンダレーに南下中との由、私たちは約四十日間（九月二十日より十月いっぱいまで乾季）待機。その間、熱地教育を受けました。そのうちに母隊はマンダレーに到着との連絡があり、私たちはマンダレーへと北上しました。母隊へ到着してやっと、壮八四一五部隊第三大隊第九中隊へ編入され一応ホツと落ち着きました。

二日経て歩兵より三人（私を含む）と工兵より下士官一人、兵七人、計十一人がラングーンへと逆戻りしました。鋳物工場への転属である。そこには海軍の速射砲陣地があり、海軍の給与を受けながら砲弾の弾頭造りをやりました。敵空軍は毎日来襲してラングーン

飛行場の爆撃を繰り返していました。悲しく悔しいことに制空権は完全に敵にとられている。一度敵機の来襲があり、英軍高射砲を撃ち上げ、四発のうち一発がグラマンに命中して皆歎声を上げて溜飲を下げました。

大体敵機は九〇〇〜一万メートルの上空を飛んでくる。日本軍の砲は七〇〇メートルくらいまで、九〇〇〜一万メートルまでは届かない。それが英軍の砲で英軍の弾丸で英軍機を日本軍が撃墜した。タイムン国境で敵機のため戦死した七人の戦友の仇討をしたような気がしました。

昭和二十年の五月中頃、連隊本部へ転属となりました。本部はすでにタイのバンコクへ移動して、そこにはいませんでした。ただ連絡將校として一人が残っていました。ここでの思い出は軍票一〇〇箱（推定で一億円程度か）をガソリンをかけて焼却したことです。そうこうする間に將校一人、トラック一台を中心にしてモールメインへ来いとの連絡により、米と白い布地

を積んで出発しました。途中、橋が落ちているのでトラックを捨てて、人力搬送で荷物を運び、モールメン着。ビルマ人は白い布地を大層喜ぶので、バナナ・ドリアン・マンゴー等と交換して南の果物を楽しみました。

数日して敵の戦車に追われてベグー山脈の中へ逃げ込みました。そこには「壮八四一五部隊」の主力が集結していて、大いに心強く安心しました。そこでも執拗な敵戦車の攻撃に追われて、逃げまわったことを思い出します。が、ここでも喝采を上げる嬉しいことがあります。友軍の野砲が敵戦車二台を砲撃してやっつけたのです。

戦車の来る地点へ陣地を設けて準備して迎撃をかけ、その後の戦車の行動を封じました。そうして山中を約一カ月間迷い歩いているうちに東の方のシッター川へ行けとの命令でした。山中では二十日間くらいの食料は自給できましたが、それ以後は徴発や盗みでのぎました。こうして辛い逃避行が始まり、日本内地では体験できない「水と兵隊の苦戦物語」へと入っ

て行きます。

先に述べたようにベグー山脈を出てからシッター川へたどり着いたのは七月二十五日頃、距離にして約三〇キロぐらいか。とにかく昼間は敵飛行機のため森林の中へ逃げ、夜間湿地を歩く。巻脚絆、靴、靴下まで水で浸り放して乾く間もない。それでも昼は木に登り、帯革で体を木にしぼりつけて落ちぬようにして仮眠をとります。中には眠りこけて木の上から下の水のある湿地へ落ちる者もいました。時として竹の柱にヤシの葉の屋根の小屋に数人で昼間を過ごすこともありました。

どうにか川へ着きました。靴を脱ぐと足の皮がペロリとむけました。足の治るまでそこに滞在。木の枝にかけておいた編上靴は干乾びてコチコチで履けませんでした。そこで油を工面して来て塗ると少しやわらかくなりました。

そのうちに、筏に乗って川下りをしました。竹の筏を二重に組んで、装具類は全部筏に乗せ、人は禰一本

になり、夕方を待って移動、渡河もしました。川幅は約三〇〇メートルくらい。三キロくらいの間隔で蛇行して曲がっています。一台の筏に十人位取りついて片手で筏にすがり片手で漕ぐ。私も若さにまかせて先頭に位置して漕ぎました。なるべく川の中流の流れの早い所へ行って早く移動できるようにします。下流の一口所に日の丸を見つけて筏を着けて上陸しました。とにかく東へ東へ、タイ国の方へ行けとのことでした。

川から上がると毎日敵の砲兵陣地より撃たれます。

二三日敵と撃ち合って小隊長一人、兵一人計二人戦死。苦戦を重ねてマルタバンにたどり着いたのが八月十二日で、そこには大隊の主力が集まっていました。

翌日のこと。「今日は盆の十三日だから団子でもして食べよう」と砂糖きびを切りとり砂糖の団子を作りました。皆で分け合って故郷の盆を偲びました。

さて、翌八月十四日、敵の飛行機はたくさんビラをまきました。攻撃もして来ない。やがて終戦を知りました。

八月十九日、軍旗奉焼。縁だけ残っている軍旗に挿げ銃をして奉焼しました。今までの帝国軍隊の伝統、しきたり、誇り等一切消えて、これから先、何を考え基準にすべきか不明のまま、虚脱の状態でした。

九月二十日頃武装解除され、捕虜(PW)となりました。食物は最小限でしたが戦犯の面通しはなかったです。

川沿いの平坦地に一〇〇×二〇〇メートル位に、既にあつた建物を囲んで鉄条網を張りました。今まで着用していた自分の衣類はポロポロ。敵の衣服と取り替えましたが服はダブダブ、靴は十二文、お互いの姿を見合わせ笑い合つたものです。約三カ月間は雑炊ばかり(米は一人一合、コンビーフ七人一缶、ベーコン七人に一缶)でした。三カ月経って米は一人三合、野菜も支給がありました。

毎日使役に出されて爆弾の穴埋めや寺院の修理、川の石積み、橋の修理等すべて復旧作業でした。完了したのは終戦後約一カ年弱くらいのことでした。

昭和二十一年七月十日頃、ラングーンの飛行場へ撤退せよとの命令があり、ラングーンへ向け一週間ほど行軍しました。船待ちして乗船は七月二十七、二十八日頃、「亭佑丸」という貨物船（一万トンぐらい）でした。

豊後水道を通り広島の子品港へは昭和二十一年八月五日に上陸。検閲。五百五十円と毛布半分（カミソリで半分に切る）と乾パン一週間分の支給がありました。街へ出て歯ブラシ、歯磨き粉、タオルと三点買ったら二百五十円とられました。「うわー！ これは高いぞ」ともらった五五〇円は幾日保つのやらと心細い思いがしましたが、でも国鉄のただの切符をくれて有り難かったです。

収容所へ入った時から郡編成でした。同郡同町村の者同士が固まり集まって生活をしました。心強く仲よく助け合い、昔の内務班の厳しさの面影もなく、兄弟のように親密に過ごしました。

昭和二十一年八月十日夕方、懐かしいわが家へ帰

宅。復員完了。父は泣いて喜んでくれました。

結婚は昭和二十五年六月。現在妻も元気で子供は女、男、女。孫は六人（男五人女一人）です。

戦争体験による労苦の思い出としては、次のことがあります。

一 対抗ビンタ

二 ベグー山脈中の食生活は塩とゴマで一カ月。

三 小さいウド蠅対策。小銃弾十発の火薬を抜いて生木をくすべて発煙した。

四 マニラ上陸、十日目よりマラリヤ。週二―三回。

五 最も困ったのはマルタバンでのアメーバー赤痢でした。薬はなし、木炭を食物の中へすり込んで練って食べました。そのうちバナナがとても欲しくなると、私物のメリヤスのシャツを出してバナナ十本と交換し、やけくそで十本のバナナを全部食べると不思議にも下痢が止まり病気が全快しました（ウソのようなホントの話）。

復員後の地域の役員としては、地区の消防団、農業
共済組合、農地委員、農業委員、農協理事等を歴任
しました。

最後に、戦病死した亡き戦友の御冥福を祈って我が
身のいましめとしております。